

「無償＝無上の贈与」としての生涯学習

—または、社会の人的インフラストラクチャーとしての生涯学習—

牧 野 篤*

Lifelong Learning as a 'Priceless Gift' - Or Lifelong Learning as a Human Infrastructure for Society -

Atsushi Makino

In Japan and many other countries in the world, lifelong learning has become a political task. Behind this are the increasing globalization of economies, the rapid birthrate decline and the aging of societies. These changes correspond to the fact that society as we know it is shifting all over the world, from that of modern industrial states that need large labor forces and consumer markets to that of the fluid markets of information, finance, and services that satisfy the individual tastes of consumers. This may be paraphrased as follows: The way society transmits knowledge is changing from a school-centered society to a society where each individual uses such knowledge by modifying the way the knowledge is according to their own values, and thus produces his/her social values. In other words, knowledge is being modified from stock to flow. What attracts attention amidst such radical social changes is lifelong learning. Actually, the question we should ask here is the following: In which framework should we define lifelong learning, which was developed to face the shift of knowledge from stock to flow. What we intend to confirm in this paper is that the universal structure in the form of hands-on activities of education/learning in lifelong learning is a cycle structure where overachievement resulting from the self-recognition retrospectively induced by education/learning drives both the learner and the teacher to a higher level of learning and, through this process, creates a human infrastructure, and leads to the creation of new social values. We have to find a way to guarantee lifelong learning that would help such cycling, but such a way should not be conceived in the dichotomy of public/private, social right/civil liberty, etc.

目次

- I. 生涯学習をどうとらえるか
- II. 大学における市民への授業公開プログラム
 - A. プログラムの概要と受講動機・受講後の感想
 - 1. プログラムの概要
 - 2. 受講動機と受講後の感想
 - B. 自分の変化について
 - C. 大学の社会貢献について
 - D. 本プログラムから見られる市民の意識
- III. 高齢者世代の価値観
- IV. 「つながり」への希求
- V. 高齢者の関心事の構造
 - 1. 「健康」を求める意識
 - 2. 「社会的貢献・ボランティア」と重層的ネットワーク
 - 3. 「趣味」の楽しみの構造
 - 4. 「仕事」と責任感・倫理観
 - 5. 「家族」への複雑な思い
- VI. 結びついていること
- VII. 「自己の永遠化」へ
- VIII. 「無償＝無上の贈与」としての生涯学習と知識の社会循環へ

*生涯学習基盤経営コース 教授

I. 生涯学習をどうとらえるか

日本をはじめとして、世界各国で、生涯学習は政治的な課題として受け止められている。その背景には、経済のグローバル化の展開と少子化・高齢化の急激な進展が存在している。この二つの大きな変動は、また、経済のグローバル化の進展による一国の統合された国内市場の不要化・解体と雇用の不安定化がもたらす社会不安や、国家財政に依存する福祉政策の破綻がもたらす社会の動揺などとして、国内的には現れている。また、それは、国家間関係を基本とする世界秩序が崩れ、民族間の対立と宥和、さらにより小さなコミュニティ単位の経済とその競合・協調が課題として立ち上がってくるなど、世界全体を覆う単一の秩序の動揺・解体と結びついている。

世界単一秩序の動揺・解体は、大規模な労働市場と消費市場を必要とする近代産業国家の時代から、人々の個別な嗜好に対応する情報・金融・サービス産業を中心とした、個人をターゲットとする流動的な市場の時代へと、地球規模で社会のあり方が移行していることと対応している。一つの大きな物語が存在し、その共有を人々に求めることで国家的な統合、つまり統一市場を形成し、国家経済の規模拡大を競う時代から、大きな物語が崩壊し、人々が個別の価値をもって流動することで経済的な価値を生み出す時代、すなわち多元的で流動的な市場の形成が求められる時代へと社会は移行しているのである。

これは、また、次のようにいうことができる。「知識」を蓄え、共有することで、社会的な価値が高まる社会、つまり、国家が認定した価値観にもとづいて選ばれた画一的な「知識」を学校で伝達し、各個人がそれを蓄えることで、社会が統合されるという学校中心の社会から、各個人が自分の価値に基づいて、その都度、知識のあり方を組み換えて使うことで社会的な価値が生み出される社会へと、社会の知識伝達のあり方が変化しているのである。それは、知識のストックからフローへの組み換えであるといってもよい。

このような大きな社会変動の中で、注目されているのが生涯学習である。それは、一般的には、人々に、学校教育修了以降も、生涯にわたって学習を継続することで、新たな価値を生み出し続け、生活を向上させる機会を保障することと、そのための人々の継続的な学習実践であると理解される。それ故に、生涯学習は、人々の一生涯の生活や価値実現と関わる、つまり人々の生活の質のあり方と深く関わる、公的に保障されるべき権利であるとされる。すなわち、生涯学習とは、人々が個別の生活を豊かに生きるという自由権を保障するために、社会的

に保障されるべき社会権だという考え方である。

他方、生涯学習は上記のように個別化し流動化する個人の知識の組み換えの営みであるが故に、単一の価値観やそれにもとづく「知識」の伝達であってはならず、いわゆる公的な事業として保障されるべき権利にはなじまないという考え方もある。教育や学習が公的に保障されるのは、産業社会が人々に画一的な価値を保有することを求めるが故であって、国家もそれを保障するための機構でしかないというのである。今や、このような産業社会を基本とする社会システムは解体しているのであり、人々に産業社会と同じように、画一的な教育・学習を保障することは、価値の多元性と流動性を抑圧し、却って、人々の生活の質を損なうことになる。この論理では、生涯学習は、近代産業社会の次に来る価値多元的で流動的な社会に対応するものであるが故に、人々が自分の必要に応じて市場を通して調達すべき「商品」だとされる。そのため、生涯学習は自由権の一部としてとらえられ、「商品」購入の自由を阻害しないことが、公的な保障の一環であるとされる。この意味で、生涯学習は、新自由主義的な市場原理ときわめて親和的な一面をもっている。

生涯学習は、間違いなく、産業社会から次の社会へと移行しようとする世界において、社会的に要請されて生まれてきた新たな教育・学習のあり方（理念、制度、形式、内容、実践を含めて）である。しかし、生涯学習のとらえ方をめぐる議論に目を転じてみると、それは、上記のように、いまだに産業社会のもつ論理、つまり公的保障か市場原理か、公共性か私事性か、平等か自由か、社会権か自由権か、という二項対立の図式の中でなされているに過ぎない。これは、新自由主義的な議論においても同様である。

問われなければならないのは、知識のフロー化という状況に対応するために生まれてきた生涯学習を、どのような枠組みでとらえるのかということである。その枠組みとは、近代産業社会の価値観がもつ二項対立ではなく、その二項対立を乗り越えようとする論理をもつものである必要がある。生涯学習のあり方として、公共性なのか私事性なのか、社会権なのか自由権なのか、という議論ではなく、生涯学習における教育・学習の実践活動の本質とはいったい何であるのかということが問われなければならない。実践活動の本質とは、実践の形式がもたらすより普遍的な構造のことである。教育・学習の内容にかかわらず、上記の二項対立の枠組みを超える論理を導き得る形式そのものがとらえられる必要があるのだといえる。

この実践形式の本質という観点から、二項対立の枠組

みをとらえると、この枠組みが導くのは、教育と学習、そして伝えられるべき内容を導き出す研究のもつ事後性の否定である。つまり、教育・学習や研究が常にオーバーアチーブであることが否定され、逆に、事前に決められた価値にもとづく知識を、規定通りに社会へと提供することが求められるということである。

そして、このことは、新自由主義的な教育の「商品」化において、一層顕著であるといわざるを得ない。なぜなら、このようないわゆる知識のサービス化はまた、研究や教育の規格化を求め、その結果、研究や教育・学習の自律的で自動的な進展や進化を阻害するからであり、それとは逆に、研究や教育・学習という営みが、本来、常に、予期せぬ成果によって次の段階へと展開していきこうとするエネルギーを獲得するものであるからである。このような、エネルギー獲得の根底には、人間そのもののもつ知的な探求や労働に対するオーバーアチーブな性格が存在しており、その性格はまさに人間が集団生活において相互の贈与＝交換の関係におかれることによって形成されているのである。この意味では、価値多元性と価値の流動化を主張する新自由主義的な教育の市場化論は、きわめて画一的な教育観を下敷きしているといわざるを得ない。一見、「商品」としての教育・学習は規格化され、品質が保証された上で、多様な品種が準備され、消費者である学習者の自由な選択にゆだねられているように見えても、その「商品」は、学習者の事後的で自律的なオーバーアチーブな予期せぬ変化が学習者自身の新たな進化を駆動する可能性を組み込んだものではなく、つねに消費されることで、予定された満足を消費者にもたらすだけのものに過ぎないからである。

しかも、教育の「商品」化は、社会的な価値創造の基礎をも解体する。なぜなら、剰余価値説に依るまでもなく、この社会が富＝価値の創造によって再生産されていくことの人間的な基礎は、集団生活における贈与とその贈与に対するオーバーアチーブな答礼であるからである。価値の生産そのものがこの贈与と答礼との関係によって、事後的に私たちをオーバーアチーブの応酬という関係へと組み入れていくのである。私たちは、常に事後的にしか研究や教育・学習そして労働など、他者と贈与＝交換の関係にあるものが私自身にもたらす意味を認識し得ない。私たちは、その認識を通して、私とその贈与＝交換の関係においてこそ私であり得ることを心地よい感覚とともに受け止め、確認する。私たちは自分の存在をその関係において確認するが故に、その場において自我を確立し、自分をより高次に確立し続けるために、他者との間で、過剰に贈与＝交換を続けよう、過剰に答礼しようとするのである。

このことは、より通俗的な表現を使えば、学ぶことによって自分に予期せぬ変化が起こっていることを、学んだ後に感じて、わくわくする感覚をもつために、さらに学びたくなるということである。また、教えることによって相手に予期せぬ変化が起こり、それを感じ取ることで、自分がうれしくなり、もっと教えたいということである。学ぶことと教えることの相互作用において、教える者と学ぶ者の双方がより新たな変化を来していることを事後的に感受することで、その教え・学ぶという関係がより強化されていくということでもある。それは、知的な探求においても同様である。私たちが、あるものを探求することで、目的が達成されようがされまいが、事後的に自分の変化を感じ取ることで、常に内省的にその目的に向かって探求を進める自分が組み換えられていく、それをまた自分が感じ取ることによって、さらにその探求へのめり込んでいく、こういう関係が形成されているはずである。生産労働も同様である。しかも、そこには自分を支え、自分に支えられる、自分と他者との集団的な関係が存在することで、このメカニズムはさらに強められることになる。これこそが、研究や教育・学習さらには生産の自律的な展開を支えているものである。

知的なものの探求や教育・学習という営みは、知識を提供・享受するにとどまらず、その知識を得ることにおける自分の変化を組み込み、かつ自分を社会に開いていくものである。だからこそ、それは、事前に価値を評価できるものではなく、プライス・レスであるべき営みであったはずである。教育・学習という営みは私事性にもとづいていながらも、公共性をもつものであり、それ故に公的に保障されるべき性格をもったものなのである。それなしでは社会的な価値の創造と再生産は成立し得ない、こういうものが教育・学習なのだといってよい。この意味で、研究・教育をサービスとして評価する社会は、その人間学的な基礎を失い、自ら崩壊していつてしまう。

知識をストックすることが意味をなさない社会へと社会が移行している以上、私たちは従来のような教育機会の公的な一元的保障にとどまっていることはできない。機会保障という形式は、教育という営みにおいては、伝えられるべき内容及びそれを定礎している価値と深く関わっているからである。つまり、一元的な知識伝達の機会保障は、価値の画一性を前提としなければならないのであり、そのような知識伝達のあり方は、知識をストックすることで社会的な有用性を増す社会のあり方である。しかし他方、生涯学習を個人の好みの問題であると見なして、その機会保障を完全に自由市場にゆだねるこ

とにも無理がある。それは既述のように、社会を構成している人間関係という根本的な基盤を掘り崩すことになりかねないからである。生涯学習をとらえる枠組みとして、「私事的であるが故に、公共的である」という論理の構築が求められているのである。

今、私たちが直面しているのは、このような、ある意味で、社会的な大きな課題であるといつてよい。

本稿で確認しようとするのは、結論的には、生涯学習における教育－学習実践の形式がもつ普遍的な構造とは、教育－学習による事後的な自己認識にともなうオーバーアチーブメントが、学習者と教育者双方を駆動し、さらに高次な学習へと誘うことで、それが媒介となって、人的なインフラストラクチャーをつくりだし、それが社会的な新たな価値の創造に結びついていくという、循環構造が存在しているのではないかということである。そして、この循環を促すような生涯学習の保障のあり方を考える必要があるのであり、それは、公共性と私事性、社会権と自由権という二項対立の図式ではとらえられてはならない、新たな枠組みを必要とするものだということである。以下、筆者が関わったいくつかの実践から、代表的な二つの実践を紹介し、初歩的な知見を導くことを試みる。

II. 大学における市民への授業公開プログラム¹⁾

A. プログラムの概要と受講動機・受講後の感想

1. プログラムの概要

本プログラムは、筆者が所属していた名古屋大学大学院教育発達科学研究科で行われた、市民をモニターと位置づけて、学生・大学院生向けの授業の一部を市民に公開し、授業効果を測る実験である。それは、国立大学の法人化にともなって提起され始めた教育のサービス化の議論に対して、国立大学という公共性の高い教育・研究機関と市民社会との連携のあり方を模索し、大学における教育を私事性にもとづく公共的な営みとして構築するための基礎資料を得ることを目的に構想・実施されたものである。

この「市民への授業公開プログラム」は、一般に毎学期6～8科目、30～40名の定員で行われた。受講問い合わせ数は、毎回約200名、受講申込み者数は約120名であり、各授業の開講目的と応募市民の受講動機とを勘案の上、30余名の受講者が各授業担当者によって選ばれ、受講を許可された。

受講者の男女比は約50パーセントずつであり、年々、中高年男性の比率が高まる傾向にあった。年齢その他については、おおむね50歳代、60歳代が多く、とくに団塊の世代の大量定年を迎えて、60歳代前半の男性が目立ち

始めていた。

2. 受講動機と受講後の感想

受講動機については、申込み時点で用紙に記入され、担当教員による受講可否判断の材料となった動機を、受講後のアンケートにおいて再度振り返る形で回答を得ている。このアンケートは、受講申込み時点での自分の認識を振り返りつつ、受講後に自分がなぜこのプログラムを受講しようとしたのかという意味づけを導くための措置であり、またそれは、大学における学びの事後性という点にかかわって、市民受講者の自分への気づきを誘うためのものでもあった。

受講動機は、各授業担当者によって受講可否判断の材料に使われ、受講者は授業担当者のいわば価値的判断のもとで選ばれている。このため、アンケートに書かれた受講動機をもって受講希望者の動機の全体的傾向を分析することはできない。

アンケート回答者の受講動機に関する記述の大きな特徴は、個別の具体的な課題やテーマ、または興味・関心を持ちながら、自分に即した具体的な課題が、より深い社会的な課題や知的なものの探求へと深まっており、その意識の深みから自分をとらえて、動機を意味づけているということである。彼らは、自分固有の課題に対する意識の深みから動機を意味づけているが故に、また、このプログラムがその課題に応えるものであることによって、自分の内部で、予期せぬ変化を来しており、それを認識していることがうかがえる。彼らの課題の深さと教員が提供する授業の内容とがシンクロしつつ、彼らの新たな変化を導き出し、その変化を心地よいものと感じることで、自分に対して肯定的になっていく彼らの存在がそこにある。彼らは、このような自分への認識を繰り返すことで、さらに学ぶことへと積極的になっていくようであるし、そのような自分を心地よく感じつつ、大学の授業に対する評価を高める結果にもなっているように思われる。

このプログラムが、教育・学習の事後性(予期せぬオーバーアチーブメントへの気づき)を引き出していることがよくわかる。下記のような記述がある(*が動機、→が感想)。

*現在私は教育機関において教育相談を担当している。具体的には小・中・高校生とその保護者を対象にした電話相談、面接相談である。実際にケースにあたるごとに、見立てが大切だと日々実感している。アセスメントを学び、ケース理解に役立てたいと思った。→私は教員養成の学部出身なので、心理学を系統的に学んでいない。養護教諭として勤務しながら、修士課程で心理学を専攻した。だから、大学院では背伸びしな

がら講義を受けたり、ゼミに参加したりしていた。本講義を受講して感じたことは、基礎を積み重ねていけば、着実な知識として身につけていくということである。現役の大学生と机を並べて学ぶという貴重な体験だった。

* 高度専門職業人コースの大学院で2年学び、修士論文を書いた。しかし、学び終えた感じが少しもせず、学び足りず、考え足りない感じばかりが残った。学びつづけ、考えつづける姿勢を自分の中で確かなものにするため、刺激の多い講義を定期的に聴くことは大いに意味があったと思っている。

→ 教育の問題が縦横に語られ、興味深かった。話題は、家庭・学校の内外を行き来し、子ども、青年の問題に限らず多世代にわたった。日本の国内、東アジア地域の問題にとどまらず、グローバルな視点からの話を聴いた。他では聴くことの出来ない話で、自身が直面する様々な問題の由来や背景を知ることが出来てよかったと思っている。

* 小学校で「心の相談員」として勤務していると、現在の子どもが抱えている悩み・考え・行動が見えてきます。相談員として子どもとどのように向き合い、どんな対応をしていくことが、子どもたちの心を開き、問題解決につながっていくのだろうか？専門的に心理アセスメントを学ぶことによって自分自身の考え方を深めてみようと思った。

→ 32年ぶりの大学の授業にわくわく感と同時に子どもと同年齢の学生たちと席をともにすることに気恥ずかしさもあった。講義の中味は仕事とかかわりがあり、興味を持って臨んだので、久しぶりにノートを取り、先生の話真剣にきく学びの時間がもてたのは、新鮮でした。名大の学生が大変まじめに講義を受けているのに好感を持ち、公開プログラムの人、科目履修の人とも友だちになれ、この人たちの向学心の熱さに驚き、共感し、語り合えたのも貴重な経験でした。

B. 自分の変化について

上記のように受講動機と受講後の感想を書いている市民受講者は、自分の変化をどのようにとらえているのだろうか。彼らは、様々な受講動機からこのプログラムに参加し、その受け止め方も様々である。しかし、彼らに共通しているのは、自分が事後的に変わっていることへの気づきと新鮮な驚き、そしてそこから発するさらに深く学問的な探求へと向かわないではいられない強い思いである。受講者は、次のように述べている。

* 子育てをし、家事に追われて過ごしていて、自分のために専門的な分野を大学という場所で学ぶということ

は、雑然としていた知識の中で、1本の道が開けたような感じがしました。大学に通うのも楽しかったです。学生たちが構内を歩く波に若さとエネルギーを感じ、意志を持って行動することは楽しいと感じました。改めて専門的な知識を学び、ノートをとったり、グループ討議することが新鮮で、「学び」の意欲が生まれたように思いました。同年齢の人と知り合い、探求心を持って生活している人と話すことで、自分もいろいろなことに興味を持って生きていきたいと思いました。

* 先生方の熱心で精力的な講義と多方面での教育活動。社会人を受け入れて開かれた大学をめざそうとする心意気。このプログラムに参加すれば必ずと共感し、感化される。これが講義を受け、警咳に接する意義なのだろう。地域活性化活動に身を置く私は、愛知県主催「地域活性化プログラム」のコンペに企画書を応募し入選した。このメニューの一つとした地元小学校の総合学習に講師として参加した。これまで小学校にかかわったことがなく、自分の子供の教育は女房まかせ、PTAの会合ともまったく無縁であった私が、社会活動に参加し、学校評議員を引き受け、子供相手に小学校へ、いそいそと出かける。このように、自分自身を変えていこうとする姿勢は、この社会人参加プログラムで得られたもののように思う。

* 「結果」と「過程」、いつも悩まされてきた。ボランティア支援をしていたこともあり、「ワークショップ」を行うことがとても多かった。その時、いつも感じていたのが「結果」の出ない議論、「考え方の共有」「お互いを知ること」それがワークショップであり、参加者は結果までなかなか知ることができない。今回の授業の進め方も、ワークショップ形式であり、ストレスを感じるだろうと思っていたし、最初の方はストレスを実感感じていた。しかし、続けているうちに、これはこれでよいのだと感じるようになった。学生にとっては一つの答より、いろいろな人の意見・考え方を聞いて、そこからまた自分で勉強し、自分なりの答を見つけていけばよいのだから。「結果」重視で考えていた自分が少し考えさせられた感じがある。社会人と学生の大きな違いは「時間の流れ」だと思う。社会人には、仕事に対して期日がある。だからそこまで「結果」を出さなくてはいけない。そのため、「結果」ばかりに目がいって、その「過程」をおざなりにしているところが少しあるように感じるようになった。「過程」を限られた時間の中で、どれだけ充実したものに行えるかを考えていかなければならないと思う。

C. 大学の社会貢献について

さらに、大学の社会貢献のあり方について、たずねたところ、以下に例示するような回答であった。市民受講者は、大学のあるべき姿については、大学内部にいる研究者・教員とかなり近いイメージを抱いているものと見てよい。それは、つまり、大学は、研究の論理に支配された自律的で自治的な組織として、真理を探究し、その成果を学生教育をとおして社会に還元することこそが、その基本的な社会貢献機能であり、その上で、このプログラムのような市民への働きかけを基本とした知的な還元を行うべきだとするとらえ方である。このことは、研究と教育または学習という営みが、一見、私的な営みであるように見えながらも、その実、それは事後的に人々のオーバーアチーブメントを誘い、社会的な還元へと展開していく公共的なものであることを、受講者である市民が感じ取っていること、またはこのプログラムをとおして自己認識を深めることで、教育・学習が私事性にもとづく公共的営みであることに思い至っていることを示している。大学は、こうした市民たちと連携することによって、その研究の論理に支配された自律性と自治を、私事的な研究・教育機能を公共化することへとつなげ、教育をサービス化しようとする昨今の動きに対抗する知の公共圏へと自らを組み換えることが可能となる筋道が示されているようにも思われる。市民受講者は次のように書いている。

*実際のところ、まずは大学がやらなければならないことは、勉強を行いたい学生を集め、その学生を社会にしっかりと社会人として送り出す、これが一番の社会貢献だと思う。それには、名大としての校風、理念等、名大でないといけないことの確立が必要だと思う。正直、義務教育の延長で大学まで来ている学生も多いような気がする。だから今は、大学が大学としてやるべきことをしっかり行い、それを社会に認めてもらうことだと思う。それなしには、社会貢献活動を行っても、大学のイメージupのためにやっているんだらうなとしか感じない。

*社会生活を営む中で、私たちは様々な困難にであったり、疑問を持ったり、新たな興味の対象を見つめますが、その「根本」を知りたいと思ったとき、大学という場がそれらについて深く学び、新たな世界に出会える機会を与えて欲しいと思います。これから社会の戦力となる人を育てる役割と、社会人が物事の根本に立ち返る場を与える役割の、両方を果たしていくべきでは、と思います。このプログラムは社会人が本格的に学び直そうかと考える時の良いきっかけ、入口になるかと思っています。

*大学1年の時、一般教養で受講した「学校保健」担当のA教授の人間や社会に対する真摯な姿勢は、教育に携わる者としていつも心にとどめている。A先生は臨床医（女性）であった。戦後、高知県下を巡回診療されたとき、「日本が復興を遂げるためには教育こそ大切である」と確信され、臨床医から教育学部の教授に転身されたということであった。大学は研究機関でもあるので、科学の進歩に貢献していただくのはもとより、次世代を担う若人を育てるという視点も大切にしていきたい。創造性、人間性豊かな人材を育てていきたい。

D. 本プログラムから見られる市民の意識

本プログラムの実施によって得られた知見は、以下のとおりである。つまり、市民は、知識をサービス商品と化し、大学を教育サービスの提供機関と見なすのではなく、学問研究の高みから、市民生活の抱える課題の原理をとらえ、その課題を突き抜けて市民自身の存在そのものに関わるような原理や哲学を提示することを大学に求めており、しかも、そのような原理や哲学など、研究の成果を、学生教育を通して社会に還元してこそ、大学と社会との結びつきが確かなものとなるとらえているということである。つまり、「大学は知の論理で社会と結ばれるべきだ」ということである。それはまた、学問研究が、きわめて私事なことであるのに、それが社会的に開かれていく、その橋渡しを大学の授業ができるということであり、これこそが、大学を社会に開くということだということである。

しかも、市民受講者は、このプログラムを通して、大学で学ぶことが私事的な学びからいかにして公共性を持つようになるのか、その筋道を、彼ら自身の自己認識の展開において示してくれているといつてよい。彼らは、大学での学びを通して、授業の内容に触れ、自分の目を開かれ、思考を啓かされている。また、彼らは、同じ市民受講者とふれあい、学生たちと交わり、教員との間で刺激を受けることで、自分が大きく変化していくことを実感と驚きをもって受け止め、その変化を心地よいものとして感じ取り、さらに知的な探求へと向かおうとしている。この過程で、彼らは、大学に対して自分を開き、社会に対して自分の役割を示そうとし、それがまた自己認識へと還っていく。こういう自己認識の循環が形成されているのである。この知的な自己認識の循環こそが、本稿で示している研究・教育・学習の事後性にもとづくオーバーアチーブメントの実態なのであり、それこそがこの社会を支える人間的な基礎なのだといえる。大学における知的な探求とその伝達は、私事的でありながら常

に公共性へと展開し、その公共性が受講者自身の生活へと還ってくるという関係を創造するものである。この循環こそが、大学を、教育を私的なサービス商品としようとする動きに対抗する、私事性に定礎された公共圏へと形作っていくものといえる。この循環の節目に、市民が関与し得るのである。

このことを示している受講者のレポートの一部を以下に引用して、本節を閉じたい。

「参加してみて、このプログラムの主催者に対する認識を新たにした。最近の国際化や生涯学習社会に向けて、私学例えば関西では立命館大学などが積極的である。一方、国立大学は一般にそうではないようであった。「教職員の意識低下、公務に安住し、研究の名の下にノルマ減少を主張している」とこれまでは言われていた。／しかし、このプログラムに参加して認識を改めた。ここでは、外国人留学生が多く、社会人院生も多い。時代の風が感じられた。／こうした空気を私は地元を持ち帰り、コミュニティ活動にぶつけてきた。時代の風に合わせて、25年ぶりにコミュニティの組織替えを行い、規約を全面的に改めた。また愛知県の主催する「防災まちづくり活動」や「地域活性化プログラム」などのコンペに応募し、数々の入選を勝ち取った。それらの企画書は「防災まちづくり組織計画」「東部遊歩道利用計画」「わんわんパトロール」であり、愛知県より今年度新規に100万円の補助金を得た。このプログラムに参加しなければ、これらの活動は進展しなかった。／逆に、大学にとっては、社会人の受け入れは大きな刺激剤となり、新たな展開の突破口になれたら良いと思っている。つけ足的に受け入れを許すのではなしに、むしろ大学の中枢部分として異質集団による新たな教育、研究の活動源として、大

規模な受け入れの方向へと進むべきだろう。こうして、国、県、地域、そして民間の教育エネルギーの総合的な組織化へ向けて駒を進めていくべきだろう。その中心が、この学部であることを期待します。」

Ⅲ. 高齢者世代の価値観

A. 「つながり」への希求

次に紹介するのは、筆者が関わっている高齢者向けのセミナー事業にみられる高齢者の価値観と学びとの関係である。たとえば、堀薫夫は高齢者の学習ニーズに関する調査にもとづいて、次のように述べている。「高齢期には喪失の事実（生理的機能の低下、退職、子離れ、親しい人との離死別など）がより顕著になるとともに、人生の有限性の自覚がより現実的になるという実存的特徴があり、この高齢者特有の実存的状态が「つながり」へのニーズを生むと考える……。このつながりには、過去とのつながり・未来とのつながり（あるいは悠久なものとのつながり）・社会とのつながり・他者とのつながり・異世代（次世代）とのつながりという側面が考えられるが、それぞれの位相において独自の学習展開方法があると考えられる²⁾。

堀はこれを整理して、〈表1〉にまとめている³⁾。

また、堀は、この高齢者の学習ニーズを年齢階層別に調査し、「つながり」を求める学習ニーズは質問項目の「ほとんどにおいて、60代よりも70代以上の者のほうに学習要求率が高いことが示された」という。堀は、これを高齢者の実存的問題の表れであると考え、「高齢者の学習ニーズは、エイジングの進行にとまない、……「つながり」において先鋭化する」のだと指摘する⁴⁾。

このような堀の調査結果とそれにもとづく見解は、筆

〈表1〉「つながり」を軸とした高齢者の学習ニーズ

ニーズ	つながりの方向	意味するもの	学習の事例
親和的ニーズ	他者	人間関係の充実化そのものが目的になる	他的高齢者などとの交流活動
ライフ・レビューへのニーズ	過去	自分の過去をふり返り、その意味と統合感を得る	ライフ・レビュー活動
超越へのニーズ	未来	身体能力の低下や余命の減少という制約条件を乗り越えたい	古典・歴史・文学・芸術などとのふれあい
社会変化への対応へのニーズ	当該社会	急激な社会変動に遅れないようにしていきたい	時事問題、ボランティア活動
異世代交流へのニーズ	異世代	次世代と交流し、自分の経験や知識を伝えていきたい	異世代交流活動

(堀薫夫「高齢者の学習ニーズに関する調査研究：60代と70代以上との比較を中心に」、堀薫夫編著『教育老年学の展開』、学文社、2006年(第6章)、p.124)

者の高齢者向けセミナー事業の実践とそこから導かれる知見とも、ある程度合致するものである。筆者は、岐阜市内で企業退職者を主たる対象としたセミナー活動、自主グループの形成と活動の促進、さらに社会貢献活動への展開を支援するプログラムを2001年より継続している。このプログラムにおけるアンケート調査と実践記録からは、高齢者の学習ニーズの基礎となる関心事は、基本的に「健康」「趣味」「社会貢献・ボランティア」「仕事」「家族」の5つの領域でとらえることができ、その各領域における高齢者の意識を貫くものとして「つながり」が存在していることがわかっている。

そこで明らかとなったのは、「健康」「社会貢献・ボランティア」「趣味」「仕事」「家族」に対する意識を通して、一つのテーマが存在するということである。それは、自分が人として他者と結びついていることと、人間としての尊厳、生きがい、社会貢献への思いとが還流しているということである。以下、この5つの領域に対する高齢者の意識を概観しておく。

B. 高齢者の関心事の構造

1. 「健康」を求める意識

「健康」は、高齢者世代にとって極めて切実なものとして受け止められ、関心が高い。しかし、健康は、健康そのものとして受けとめられているのではない。彼らは、自分の存在が家族や知人・友人そして社会の見知らぬ人々の「おかげ」で生かされてあることに感謝し、だからこそ迷惑をかけたくないと思い、そしてその他者との間に生かされてある自分を感じ取ることで、自分の人間としての尊厳を思い、他者の幸せを願っている。この意識の営みにおいて、「健康」が意識されているのである。彼らは、次のように述べている。

- * 3年前、脳溢血で入院しましたが、今では普通に健康で毎日元気にしておいて貰えて、家族楽しく暮らさまして、本当に有難うと感謝致しております。
- * 健康でいられることを心から願っています。家族に迷惑をかけないで生きたいと思う。仲のよい家族がいて、いい友だちがいて、自分の好きな趣味がある。とても幸せです。
- * 八三才です。皆様に迷惑をかけない様に健康に気をつけている位で何も出来なくて申し訳なく思っています。
- * いまからだの調子がよくありません。でも、ここまで生きてこられたのは人様のおかげです。このご恩に報いるためにも、ひとり暮らしの老人にボランティアでご飯を届けて、話し相手になっています。とても、喜ばれます。

2. 「社会貢献・ボランティア」と重層的ネットワーク

「社会貢献・ボランティア」も極めて高い関心度を示すものである。この「社会貢献・ボランティア」に関する自由記述からは、高齢者世代が多様で重層的な人的ネットワークのなかで生活し、そのネットワーク相互の間を軽やかに移動しながら、自分の社会的な役割を感じ取り、人生を楽しんでいることがうかがえる。社会貢献は、彼らにとって、自分の存在がそのネットワークのなかで他者と相互に認め合うものとしてあり、この相互承認関係を基礎に、肩肘張るのではない強い責任感と倫理観に支えられた生きがいとしてあるのである。彼らは、「社会貢献・ボランティア」にかかわって、次のように述べている。

- * 隣近所や社会の人々のおかげで、これまで生きてこれられました。恩返しをするために、ボランティアとしていろいろな地域の活動に参加したり、これまでの人生の経験を子どもたちに伝えたりしています。
- * いま、私は老人保健施設でボランティアをやっています。そこで、お年寄りの世話を焼く傍ら、自分の経験を若い人たちに話しています。
- * 私は13年間の軍隊生活と5年間のシベリア抑留の経験があります。この経験を若い人たちに伝えたい。平和な世界を作ってもらいたい。
- * 何か社会に役立つことをして、美しい心を作り出したい。いま、地域でお掃除の活動と子どもたちに本を読み聞かせる活動に参加しています。

3. 「趣味」の楽しみの構造

「趣味」に対する意識にも高いものがある。それは、趣味が第一義的に楽しいからであり、それが健康に結びつき、友だちに結びついているからである。「趣味」は、それそのものとして極めることで自分が高まることを実感でき、自分自身の存在をその中に見出すものとして、まずある。そして、それは、自分を他者へと結びつけるものとしてあることで、自分を社会的かつ歴史的に開いていくことにつながるが故に、生きがいへと結びついていくものでもある。「趣味」について、彼らは次のように記している。

- * 高齢となり、趣味を生かした横のつながりを大切にしています。横のつながりがあると友だちが増えます。横のつながりを通して、地域の活動に参加して、健康づくり或いは長生きに感謝して社会奉仕でご恩返しをしています。
- * 社交ダンスをしております。とても楽しいです。友達が出来ます。
- * 草花が好きで、山野草、球根・草花を交換して花の咲

く楽しさ、人の和が広がって生きる楽しさを味わっています。趣味を通して、幸せです。

*歌を聞いたり唄ったりすることが大好き、健康にもいい。習字を子供に教えることが生きがい、趣味をとおして子どもと仲良しになれる。

4. 「仕事」と責任感・倫理観

「仕事」も「趣味」と同様に、自分を社会的・歴史的に開いていくものとしてある。しかし、「趣味」と決定的に異なるのは、それが高齢者世代の人々一人ひとりのそれまでの生き方そのものの延長にあるということである。その意味で、「仕事」は泥臭いものとして、継続されており、しかもそれが社会的・集団的に強い責任をとるものとしてあり続けている。彼らにとって、「仕事」は、自分そのものであるが故に、自分の社会的・歴史的な役割や責務である。そして、その自分自身であるものが社会的・歴史的に開かれて自分へと還ってくるが故に、それは「天職」なのであり、生きがいでもあって、自己の存在証明でもあるのである。彼らは「仕事」について、次のように述べている。

*編み物をうちでやっています。編み物が大好きで、編み物は自分の天職だと感じています。お客さんにできあがったものをお渡しするときの笑顔に、とても幸せを感じます。

*家で仕事(洋裁)をいただき、ほそぼそと頑張っているのが楽しみで続けています。仕事をお客さんに手渡すときに、とても充実した感じがします。

*現在妻と二人で市営住宅に住んで居ますが、福祉関係の仕事に従事して、妻はパート、自分は通所者(学園の分場作業など)の送迎運転手をして居る。健康で妻と共に同じ職場で働ける事が生きがいと思っています。

*現役時代に取得した資格を生かして定年後、再就職している。パソコンで市のホームページ作成のボランティアや、写真を趣味とし、多くの友人とのコミュニケーションを図ることができ、健康にも恵まれ、今のところは充実した毎日を送っています。

5. 「家族」への複雑な思い

「家族」については、その家族が自分と切り離し難く存在していることによって、彼らには極めて切実に意識されている。彼らは、自分の存在と重なっているが故に引き剥がせないその人が自分から離れていかざるを得ず、自分もその人から離れて行かざるを得ない現実を受け入れることを強要されて戸惑い、うろたえている。だからこそ、彼らは子ども世帯との同居を望み、孫の世話をできることに幸せを感じる、つまり自分の命が繋がっていくことに自己の存在を確認しているかのように

見える。彼らは、「家族」を次のように語っている。

*妻を亡くしてから生き甲斐を感じずこともなく、2年が経過しました。やっと趣味の魚つりや旅行にも行くと思う様になりました。

*はじめての孫が誕生したばかりです。とてもうれしくて、満たされた感じがしています。孫一人でこんなにも感じがちがうなんて、思ってもみませんでした。人生が変化して行くことでしょう。しっかりと、そしてきちんとした生活をしてゆかなければ。

*三世同居で自分が何とか動けるうちは息子夫婦、孫達に少しでも役にたてる事があればと。これが私たちの役目です。

*夫は5年前に他界しまして息子夫婦は勤めに出ますので、家事と子守が私の大事な仕事です。おばあちゃんも孫の面倒がみれてうれしい!

C. 結びについていること

このように、自分の存在が社会的・歴史的に他者と結びについていることによって、自分の存在を位置づけ、感じ取ること、それが自分の人間としての尊厳や生きがい、そして社会貢献への思い・意欲へとつながり、彼らが自分を社会的・歴史的に他者と結びつけていく、この循環ができていくのが、高齢者世代の関心事への意識だといえるであろう。この彼らの意識は、何かモノを所有することで満たされるのではなく、自分の存在そのものが自分と他者によって承認され、受け入れられることで自分が満たされる存在欲求の充足へと展開していく。ここに、彼ら自身の新たな生き方の鍵が存在しているといつてよい。

この彼らの新しい生き方はまた、自らの存在そのものを自ら確認し、また他者によって承認されること、つまり社会的・歴史的に認められ、継承されることを求めている。彼らは、分業を基本とする産業社会の所有欲求を乗り越えて、自らの存在が生きていることそのものであり、自らの生活が生きていることそのものであり、自らの労働が生きていることそのものであるような、十全感を生きているといつてよい。それは、モノを持つことに幸せを感じる生き方ではなく、人とつながっていることに幸せを感じる生き方を選択するということである。この生き方は、彼らのもつ人間関係を通して獲得される自己への視点とそこから導かれる他者との間に息づいている自己という相互性の実存へと統合されるものであるといつてよい。

このような高齢者世代の存在のあり方は、たとえばキャリア教育の分野において Hoydt (Hoydt) のいう「働くこと」を人生において意味づけるとともに、「働くこ

と」そのものが人生において意味づいてくるという、自己実現の姿をそのまま彼ら自身の言葉によって語っているものといっただいであろう。たとえば、ホイトは次のように語っている⁵⁾。

「私が用いた「働くこと (work)」を正しく理解していただくためには、次のような関連概念の理解が必要である。／1. キャリア教育は、教育関係者のみによってなされるものではなく、社会全体の運動である。／2. 働くことを重んずる社会においては、有給にせよ、無給にせよ、すべての人々が働きたいと願っている。／3. 自分のなにかがしかの行動は自分だけのためにやっているのではなく、他の誰かから望まれてもいるという事実を知り、行動に移し、それを達成したいと願う人間の欲求を示す事例が「働くこと」であり、キャリア教育はこの理解を前提とするものである。／4. 私たちは、有給・無給の別を問わず、生涯にわたる「働くこと」を通して、自分自身に対しても、他者に対しても、自分を最もよく表現することができる。／5. 「働くこと」をめぐる価値観については、人はそれぞれの個人的価値観に最もふさわしいものとして選択して内面化する。／6. 「働くこと」が可能な状態となるには、それをめぐる選択に必要なキャリア・スキルの獲得がなされていなくてはならない。／7. 「働くこと」に意義を持たせるためには、自分自身の「働き」が、自分自身に対しても社会全体に対しても利益をもたらしているという重要な事実について理解する必要がある。／8. 「働くこと」から満足を得るためには、働いた結果として得られる感覚を心地よいと感じる必要がある。」

「働くこと」が、その人個人の社会的な意義と存在価値につながるという関わりの中でとらえられていることは明白であろう。このような社会的な関係の中で、人々が自己の存在意義をとらえることができるが故に、この社会は、働くことを人々が尊重する社会であり得る。この社会では、人々が働くということは、単に自分のためだけにカネを儲けるというような利己的な行為ではなく、自分の社会的な存在意義を獲得するために行うことが社会のためにもなるという、人々相互の関わり合いの過程において、自己を実現しつつ社会をよりよく形成していく、その過程にかかわっている自分を感じ取ることであるといえる。だからこそ、ホイトは、人々は金銭的な報酬の有無にかかわらず、働きたいと願う、そういう社会が実現するというのである。

D. 「自己の永遠化」へ

このことは、端的に、社会の人間関係の中で生きてこ

られた、つまり人様のおかげで生きてこられた自分を感じ取るということであり、ここに生きていられる自分のあり方を、人との関わりにおいて確認することで、感謝するということに始まる、自己確認の姿である。そこから、感謝の気持ち、つまり恩返しとして、社会に貢献したいとの強い思いが生まれ、その思いを抱いている自分を確認することで、自分を意味づけることができる。その上で、実際に社会貢献に歩み出ること、彼らが、新たな自分を見つけ出し、自分の社会的な意味をより豊かに生み出すことにつながる。しかも、このような高齢者世代の人々の自己確認の行動は、無理をして他人に尽くすというものではなく、自分にとってかけがえのないもの、生きがいを感じることができものを極めていくことで、それが結果的に、人様の役に立っているという形で実現していることを求めるものでもある。

それはまた、自分という存在を、人様との関係に開き、自分と他者との間で相互承認関係をつくりだして、自分の存在欲求を満たすだけでなく、自分が次の世代にかかわること、自分の存在を次へとつなげていきたいという欲求に定礎された、自己確認の行動でもあるといえる。これは、自分の人生を、人様との関わりの中で全うしながら、次の生へとつなげていきたい、自分が生きていくことの証を同時代において確認するだけでなく、次の世代においても確認しておいて欲しいという、自分に還ってくる確認の作業である。それは、同時代的な広がりや歴史的な連続性において、中心的な地位を占め、自分が生きていることを強く感じ取り、確認したいという、自己実現への欲求であるといえる。これは、また、自分は常に同時代的にも歴史的にも、人様との関係の中で生かされてあり、だからこそ、人様に対して「働くこと」ができ、その「働くこと」が人様からの認知を得ることにつながり、それがさらに自分を社会に生かしていくことにつながるという感覚である。

この感覚は、突き詰めれば、彼ら高齢者世代がホイトのいう意味での「働くこと」をいまだに続けているということの意味している。高齢者世代の人生への価値観や意識は、上記の新たな意味でのキャリアを積んでいる存在としての意識に他ならない。

高齢者の意識には、つねに、現実にいきいきと生き、人生のキャリアを、他者との関係の中で作り続けている自分の実存が息づいているのである。それはまた、自分を社会的・歴史的に位置づけ、生かしていこうとする、いわば「自己の永遠化」の作業に他ならない。

IV. 「無償＝無上の贈与」としての生涯学習と知識の社会循環へ

以上、筆者が関わった二つの試みを概観した。そこでは、市民は、大学における知識の還元を教育サービスの提供ととらえるのではなく、筆者たちが大学内部にいて自らに課すべき知識人としての立ち位置・態度と同じ観点を共有しつつ、大学における学びを経験し、学びの循環に参加できることを喜びと感じていることが示された。また、それは、市民自身が意識的にとらえていることというよりは、自分が学ぶことによって、事後的に自分が変化していることに気づき、その変化を心地よいものと感じることによって、より一層その変化の方向へと自分を展開していこうとする、ある種の過剰性によってもたらされている彼らの「態度」とでもいうべきものである。そして、この「態度」は、高齢者の生き方そのものでもあった。

そして、この「態度」こそは、私たちの社会を集団として価値の創造と再生産へと向かわせることになる人間的な基礎、つまり他者との贈与＝交換の関係に入ること、与えられたもの以上のものを答礼として返そうとしてしまうという人間存在のあり方を示し、かつ規定しているものである。しかも、この贈与＝交換のオーバーアチーブな関係は、与えられるものが事前にわかっており、自分自身がそれを得ることで何を得ることになるのかがわかっている関係の中では、形成され得ない。なぜなら、それは消費のための関係であり、モノやサービスを得ることは、ある条件を満たすものでしかないからである。それは、満足を超え出て、自分のより大きな変化に対して、社会的な感謝や申し訳なさなど、いわば自分認識の心地よさと、そこから生まれる他者に対する何か返礼をしないと居心地が悪いという感覚をもたらすものではない。サービスの購入は、自ら求めるばかりであって、与えることを生み出すことはないのである。

しかも、この贈与＝交換のオーバーアチーブな関係は、実は私たちの「自我」の構造に関わっている。自我の発生の当初から、私たちは、常に、言語を用いて自己を認識することしかできない。私たちは、その言語が自分のものでありながら他者のものでしかあり得ないことによって、常に言語の自己言及性に制約された自分の言及できなさに苛まれ続けている。私たちは自分の言及できなさを事後的に知覚しつつ、その言及できない私を言及しようとして、過剰に他者から言葉を与えられることを求めてしまう。つまり、他者を欲望してしまう。それは自己の他者化でありながら、他者を自己化してその自己をとらえようとする行為である。そのため、常に、認識しようとする自己つまり他者に投影されている自分へ

と過剰に自分を移しつつ、自分を認識し返そうとする循環を繰り返さざるを得ない。これが、贈与＝交換の循環の基本的な機制である。贈与＝交換の循環は、自己認識を求めようとする私たちの自我が他者を求めざるを得ず、他者へと自己を差し出さなければ自分をとらえることができないという自我構造のありように定礎されているのである。私たちは、他者を認識することなくして、自分を認識することはできない。

本稿中で述べている自己認識の喜びとは、実は、知ることによる居心地の悪さ、つまり自己の言及できなさに気づかされることによる、もっと知りたいという欲望に定礎されているとあってよい。それがまた、私たちを他者との関係へと歩み入らせることになる。贈与＝交換のオーバーアチーブな関係は、このことを基礎としているのである。

であるが故に、知的な贈与＝交換の循環は、贈与を受ける者に私とは誰であるのかという問を発しつつ、私を探求させ続けざるを得ず、贈与を行う者にも同様に私を探求させることになる。この二つの私の探求がリンクすることで、教育－学習の場所は、人々を、知識の探求と贈与＝交換の循環に組み込んで、社会集団の創造へと向かわせる基礎を構築することになる。それは、単に、教員－学生・受講者という関係にとどまるのではない。教員が行う研究活動が知的な価値創造の営みであることの基礎も、研究における贈与＝交換の循環の関係なのであり、そこにおいてこそ教員は社会的な責任を果たすことができる。また、学生・受講者が社会に出て知的な循環を形成し、知的コミュニティをつくり出し、社会を変革していくことも、知識の贈与＝交換の循環関係を基礎にもっているのである。

この関係は、社会的な価値の創造と再生産においても同様である。社会が価値の創造と再生産を繰り返しつつ、人々相互の関係を再生産・創造して、発展していくための人間的な基礎として、この知的な贈与＝交換のオーバーアチーブな関係が存在しているのである。

この知的な贈与＝交換のオーバーアチーブな関係は、すでに明らかのように、教育をサービス化し、市民を知的サービスの消費者と見なして、売買の関係にとらえようとする「改革」と呼ばれる動きとは根本的に原理を異にするものである。なぜなら、贈与＝交換のオーバーアチーブな関係の基礎はその事後性にあって、価値を事前に測れないところにあるが、知識の売買の基礎は価値評価の事前性にあり、オーバーアチーブな関係を形成することは不可能だからである。それ故に、知識を売買するような「改革」は、その「改革」が依って立つ基盤であるはずの人々の社会関係を分断し、人々を孤立化させな

がら、社会的な価値の創造・再生産を不可能とする社会へと社会を組み換えてしまいかねないのである。

以上の考察から改めて生涯学習をとらえ返すならば、生涯学習こそは、社会的なインフラストラクチャーの基礎であり、それは私事的な学習実践でありながらも、この社会の公共性の基礎である人間存在のつながりを生み出すものであるといえる。

しかも、この生涯学習においては、贈与を行う者が、贈与を受ける者と対等な立場にありながら、ともに存在していることが求められる。生涯学習は市民の孤立した、個別の必要にもとづいて消費される学習活動ではなく、市民が自らの必要にもとづいて、その必要を満たすためにこそ、他者を必要とするような関係の構築に赴く活動なのだといえる。これこそが学習の本質である。その意味で、生涯学習は、私事性—公共性、自由—平等、個別—全体、社会権—自由権といういわゆる近代産業社会がつくりだした権利の保障体系である二項対立の構図において理解されてはならず、この二項対立を架橋するものとしてこそ存在していると考えられるべきである。生涯学習の私事性こそは公共的に保障されなければならないし、生涯学習の私事性こそが社会の公共性の基礎となるべきものである。それ故に、生涯学習は、従来のいわゆるプライベート・セクターでもなければ、パブリック・セクターでもなく、ましてやサード・セクターでもない、新たな開かれた経営体によって担われる必要がある。この開かれた経営体はまた、市場原理にもとづく経営体あってはならず、しかし市場の外で行われる公共投資的な、または福祉的な事業であってもならない。むしろ、市場の内と外とを結ぶ中間的な領域に位置する性格を持つ経営体を構想し、生涯学習はその新たな経営体によって担われることが求められよう。

この新たな経営体とは、例えば、すでに明らかなように、私事性をベースにした公共的存在である大学、さらにはNPOや社会企業など社会貢献を進めることによって正当な対価を得る企業体が考えられる。このとき、この経営体は既述のホイットが指摘するような「働くこと」を体現するような組織であることが求められる。経営体として、金銭的な営利の大きさがその組織を駆動するのではなく、その存在が不可欠なものとして社会的に認知されることがその組織の活動を活性化し、駆動し続けるような、いわばオーバーアチーブメントを組織として実現するようなあり方である。それはまた、組織そのものが社会的に認知されることでオーバーアチーブメントを存在形態とするだけでなく、その組織の成員一人ひとりが組織内部にあって自己認識に還ってくるオーバーアチーブメントを自己の存在のあり方として獲得できるよ

うな組織のあり方でもある。今後、このような経営体のあり方とともに、それを担うアクターのあり方についての検討が求められる。

注

- 1) 牧野篤「大学は知の論理で社会と結ばれる—市民への授業公開プログラム— (2005年度前期・2006年度前期) アンケート報告」、名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属生涯学習・キャリア教育研究センター『モノグラフ・調査研究報告書No.5』、2006年10月、牧野篤「おとなが大学で学ぶということ—知の社会循環をつくり出す— (名古屋大学大学院教育発達科学研究科「知の社会還元」の試み)」、名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属生涯学習・キャリア教育研究センター『モノグラフ・調査研究報告書』No.6、2008年3月などを参照。
- 2) 堀薫夫「高齢者の学習ニーズに関する調査研究：60代と70代以上との比較を中心に」、堀薫夫編著『教育老年学の展開』、学文社、2006年(第6章)、p.124
- 3) 同上。
- 4) 同上論文、同上書、p.129。
- 5) K.B.ホイット編著、仙崎武・藤田晃之・三村隆男・下村英雄訳『キャリア教育—歴史と未来』、社団法人雇用問題研究会、2005年、pp.62-63。